

松島十湖の人生と句の風景

# 俳人十湖讃歌

秋童子



# 目次

姨捨紀行	息子の戦死	活命料	二俣南北騒動	東北漫遊	昆虫翁	尊徳の遺品	曲松の別れ	郡長異彩	管鮑の交わり	議員活動	戸長の重責	雷大江	吉平直訴	追憶
190	179	167	151	128	95	78	64	47	40	33	28	18	10	1

芭蕉忌

養女つぎ

出雲の風

二人の貧乏神

俳句の盟友

十湖の事件帳

俳人の礼

鳴門の旧知

再会

芭蕉の道

雨の訪問者

遠陽市場大火

石楠花の人

十湖不器

あとがき

216

222

226

234

240

248

263

284

292

306

322

335

341

351

369

## 追憶

市立のサナトリウムは東京郊外の小高い丘にあり、病院というより病人の安息所という方が適しているかも知れない。

昭和十一年、四十七歳になる鷹野つぎはこのサナトリウムいわゆる療養所の新館二十六舎に入った。

病棟は白壁の清らかな天井、白布のベッド、日光の降り注ぐベランダ、見下ろせば新緑の庭園が広がっている。病室には六台のベッドが二列に並び、向かい側のベッドにだけ少女の患者が一人いた。

寝巻姿のつぎのそばには夫弥三郎が珍しく見舞いに来っていた。

弥三郎は相変わらず精悍な顔をして、女性には好かれそうなタイプである。最近、仕事に忙しいとか言っ来て来なかったが久しぶりの対面だ。つぎの背に格子縞の入った赤い半纏を羽織ってやろうとしていた。

「子供たちは元気になっているかしら。それともあなたが手を焼いているのかな」

つぎは、甘えたような声で弥三郎に囁くように云った。つぎの結核が再発して、すでに半年になる。十三歳になる三男の三弥だけが同じ病院に入院しており、隣のベッドに休ん

